九州歯科大学附属病院における初診患者の統計的観察 (その2)

九州歯科大学口腔衛生学講座 (指導: 佐伯榮一教授)

宮崎 秀夫・中山 浩太郎・十亀 輝
斎藤 敏昭・佐伯 榮一

昭和60年8月17日受付

A Statistical Investigation on New Patients who Visited Department of Preliminary Examination, Kyushu Dental College Hospital. (The Second Report)

Hideo Miyazaki, Koutarou Nakayama, Akira Sogame,
Toshiaki Saito and Eiichi Saeki

Department of Preventive Dentistry (Chief: Prof. Eiichi Saeki)
Kyushu Dental College, Kitakyushu, Japan

A total of 26,026 new patients who visited Department of Preliminary Examination of Kyushu Dental College Hospital during a 5 year period from April 1980 to March 1984 was statistically investigated for monthly change, sex, age, medical insurance, examining department, residing area, chief complaint and percentage of referral patients.

The results were as follows:

1. New patients were many in March, July and August, and a few in winter. Regarding the age and sex, both male and female patients in 0 to 9 years old group were the largest in number, and those in 30 to 39- and 20 to 29- year-old groups were the second.
2. Regarding the insurance of patients, insurants were fixed in number except for December, but insurant dependents and non-insurant patients showed increasing tendency in March, April, July and August.
3. Regarding the monthly change of patients by the examining department, oral surgery patients were many in spring and summer; in conservative, prosthetic and preventive dentistry they were fixed through the year except for December; in pedodontics and orthodontics they increased suddenly in March, July and August.
4. The number of referral patients increased year by year, the percentage of referral patients was 20 to 40% through the year.
5. A total of 24,092 (92.6%) new patients resided in Fukuoka prefecture, including

18,573 (71.4%) in Kitakyushu city; 6,184 (23.8%) in Kokura-kita ward.

6. Chief complaint was pain caused by disease of pulp or apical periodontal tissue, of hard tissue except teeth, and of gingiva or marginal periodontal tissue, ranging from 15.4 to 17.1%.

Key words : Statistical observation / New patient / Preliminary examination

緒 言

本学附属病院における初診患者数は、52年度をピークに減少しつつあることを前報にて報告した¹⁾。今回は、最近5年間の初診患者の動向をさらに詳細に検討を加えた。特に、初診患者の主訴については、予診をとる上で重要であるにもかかわらず、総合予診表をみると、主訴なしというケースが非常に多く、我々教室員も予診科を受け持った当初より頭を痛めている。諸家の御批判が頂ければ幸いである。

資料および方法

昭和55年4月から昭和60年3月に至る5年間に、九州歯科大学附属病院を受診した初診患者26,026名を対象として、予診表および患者受付簿を基に集計を行ない、年度別に初診患者を月別、性別年齢別、保険別、診療科別に分類し、併せて、紹介患者の割合(57~59年度)、初診患者の居住地区および主訴による分類についても検討を行なった。なお、主訴は総合予診で行なう制限審査、すなわち、視診、触診および問診にて得られたものであり、北村ら(1978)²⁾の主訴分類を修正し、表1に示す

表 1 主 訴 分 類

1. 歯牙の萌出異常(発育異常)に関するもの
2. 歯牙硬組織疾患に関するもの
3. 歯髄または根尖歯周組織の疾患に関するもの
4. 歯肉または辺縁歯周組織の疾患に関するもの
5. 不正咬合を含む歯、顎、顔面異常に関するもの
6. 歯牙以外の硬組織疾患に関するもの(顎、顔面の慢性腫脹を含む)
7. 歯肉、辺縁歯周組織を除く軟組織疾患に関するもの
8. 嚙咀機能の回復に関するもの
9. 予防処置に関するもの
10. 歯、歯肉、顔面周囲違和感
11. 治療依頼、その他

様に11項目に分類した。

成 績

1. 年度別初診患者数

初診患者数は経年的な減少傾向が認められた(既報)¹⁾。

2. 年度別月別初診患者数

初診患者数は各年度とも7, 8月, 3月に多く、冬期、特に12月に少ない傾向が認められた(図1)。

図 1 年度別月別初診患者数

3. 年度別性別年齢別初診患者数(率)

初診患者の年齢構成を10歳間隔で男女別にみると、いずれの年度においても、男女とも0~9歳が最も多く、次いで30~39歳もしくは20~29歳の順であった。高年齢群は一概に少ない傾向にあるが、女では50~59歳が10~19歳より多い結果を認めた。男女間で比較すると、0~9歳では59年度を除き、男が女より多かったが、他の年代においては各年度とも女が男より多かった。年齢構成を比率でみると、0~9歳の男が圧倒的に高く、22.9%(59年度)~28.9%(55年度)認められた。全般的に女の方が男より年齢分布のばらつきが小さい傾向が認められた(表2)。

4. 年度別保険別初診患者数(率)

保険別初診患者を比率でみると、保険家族は最高値56.1%(56年度)~最低値53.6%(58年度)とほぼ一定

表 2 年度別性別年齢別初診患者数

年度\年齢	0～9	10～19	20～29	30～39	40～49	50～59	60～69	70～	合計
55	男 685 (28.9)	286 (12.1)	281 (11.8)	357 (15.0)	259 (10.9)	235 (9.9)	165 (7.0)	105 (4.4)	2,373 (100)
	女 674 (21.2)	363 (11.4)	512 (16.1)	478 (15.0)	379 (11.9)	375 (11.8)	244 (7.7)	161 (5.1)	3,186 (100)
56	男 639 (27.8)	244 (10.6)	293 (12.8)	324 (14.1)	281 (12.2)	236 (10.3)	155 (6.8)	123 (5.4)	2,295 (100)
	女 603 (19.5)	363 (11.7)	398 (12.9)	496 (16.0)	453 (14.6)	385 (12.4)	242 (7.8)	155 (5.0)	3,095 (100)
57	男 558 (25.6)	269 (12.3)	279 (12.8)	304 (13.9)	264 (12.1)	234 (10.7)	164 (7.5)	110 (5.0)	2,182 (100)
	女 543 (17.4)	390 (12.5)	445 (14.3)	542 (17.4)	359 (11.5)	417 (13.4)	264 (8.5)	154 (4.9)	3,114 (100)
58	男 502 (24.1)	264 (12.7)	291 (14.0)	276 (13.3)	225 (10.8)	241 (11.6)	143 (6.9)	140 (6.7)	2,082 (100)
	女 486 (17.0)	382 (13.4)	423 (14.8)	433 (15.1)	349 (12.2)	395 (13.8)	245 (8.6)	147 (5.1)	2,860 (100)
59	男 457 (22.9)	265 (13.3)	254 (12.7)	287 (14.4)	247 (12.4)	230 (11.5)	139 (7.0)	115 (5.8)	1,994 (100)
	女 499 (17.6)	372 (13.1)	413 (14.6)	415 (14.7)	347 (12.3)	374 (13.2)	257 (9.1)	152 (5.4)	2,829 (100)

() = %

しており、年間変動は認められなかった。一般患者は55年度の10.0%から減少傾向が認められ、57年度には7.8%となったが、以後は7.9%で一定していた。一般患者数は経年的な減少結果を示した。保険本人は患者数で見ると、経年に伴い僅かに減少を示したが、率では、逆に僅かに上昇する結果が認められた(表3)。

表 3 年度別保険別初診患者数

年度	一般	本人	家族	合計
55	554 (10.0)	2,002 (36.0)	3,005 (54.0)	5,561 (100)
56	458 (8.5)	1,908 (35.4)	3,024 (56.1)	5,390 (100)
57	412 (7.8)	1,975 (37.3)	2,914 (55.0)	5,301 (100)
58	392 (7.9)	1,906 (38.5)	2,651 (53.6)	4,949 (100)
59	382 (7.9)	1,844 (38.2)	2,599 (53.9)	4,825 (100)

() = %

5. 月別保険別初診患者数

55～59年度5年間の初診患者総数を月別保険別にみると、保険本人では12月を除き約800名で一定し、月間変動は認められなかった。保険家族では8月が、1,526名と最も多く、次いで3月、7月の順で、少ない月は10～2月であった。一般患者は3、4月の春期と7、8月の夏期に多く、最高は8月の512名であった。他の月は100名前後ではほぼ一定した結果を認めた。全般的にみると、

図 2 月別保険別初診患者数

患者数の多い月は保険家族と一般患者が共に多い傾向が認められた (図2)。

6. 年度別診療科別初診患者数 (率)

診療科別初診患者数はいずれの年度も、口腔外科が約半数を占め (47.7~53.7%) 圧倒的に多く、次いで保存、小児、矯正、補綴、予防歯科、歯科麻酔、放射線の順であった。初診患者数の年間変動を診療科別にみると、口腔外科は56年度の2,782名をピークに、僅かに減

少傾向が認められた。保存は55, 57年度の1,100名に対し、56, 58, 59年度は100~200名程度少ない結果を認めた。小児歯科は55年度の663名から、予防歯科は55年度の179名から経年的に減少傾向が認められた。補綴、放射線はいずれの年度も一定していた。矯正は55年度の517名から経年的に減少傾向が認められたが57年度以降は約400名で一定していた。歯科麻酔は経年的に僅かながら増加傾向が認められた (表4)。

表 4 年度別診療科別初診患者数

年度	口外	保存	小児	補綴	矯正	放射線	予防	麻酔	その他	合計
55	2,655 (47.7)	1,175 (21.1)	663 (11.9)	347 (6.2)	517 (9.3)	18 (0.3)	179 (3.2)	4 (0.1)	3 (0.1)	5,561 (100)
56	2,782 (51.6)	1,037 (19.2)	593 (11.0)	349 (6.5)	435 (8.1)	21 (0.4)	163 (3.0)	6 (0.1)	4 (0.1)	5,390 (100)
57	2,660 (50.2)	1,126 (21.2)	533 (10.1)	365 (6.9)	407 (7.7)	23 (0.4)	161 (3.0)	26 (0.5)	0 (—)	5,301 (100)
58	2,530 (51.1)	960 (19.4)	516 (10.4)	382 (7.7)	404 (8.2)	19 (0.4)	111 (2.2)	26 (0.5)	1 (0)	4,949 (100)
59	2,592 (53.7)	939 (19.5)	453 (9.4)	306 (6.3)	399 (8.3)	19 (0.4)	88 (1.8)	28 (0.6)	1 (0)	4,825 (100)

() = %

7. 月別診療科別初診患者数

55~59年度5年間の初診患者総数を月別診療科別にみると、口腔外科では春期から夏期にかけて多く、秋期から冬期にかけて少ない傾向が認められた。保存、補綴、予防歯科は患者数の少ない12月を除きほぼ一定であった。小児歯科、矯正は他科に比べ月間変動が著しく3, 7, 8月に急増する傾向が認められ、特に矯正における8月の初診患者数は、年間総数の1/4を占める結果であった (図3)。

図3 月別診療科別初診患者数

8. 年度別月別紹介患者数 (率)

紹介患者数は57年度の1,336名から、58年度-1,371名、59年度-1,415名と増加傾向が認められた。57~59年度は初診患者数が減少傾向にあることから、初診患者数に対する比率は、25.2%から29.3%まで上昇する結果が示された。紹介患者数を月別にみると、特に大きな変動は見当らず、季節的 (受診しやすい時期) 差異は認められなかった。従って、初診患者数の少ない秋期から冬期にかけての紹介患者の比率が高い傾向にあった (表5)。

9. 居住地別初診患者数 (率)

55~59年度5年間の初診患者の居住地をみると、小倉北区が6,184名で最も多く、次いで小倉南区-3,961名、八幡西区-2,058名、八幡東区-1,972名、戸畑区-1,677名、門司区-1,443名、若松区-1,278名の順であった。北九州市7区の合計は18,573名で、総数の7割強を占めていた。北九州市外では遠賀郡、京都郡、行橋市が比較的多く、北九州市以外の福岡県内居住者は5,519名で2割強を占めていた。県別にみると、福岡県が24,092名と圧倒的に多く、総数の92.6%を認めた。福岡県以外では、1,831名中、山口県が895名、大分県が620名と両県で8割以上を占めていた (表6)。

表 5 年度別月別紹介患者数

年度\月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	合計
57	115 (24.9)	114 (27.6)	115 (23.0)	142 (25.5)	138 (23.7)	123 (29.4)	106 (27.4)	89 (24.2)	95 (27.8)	75 (19.9)	96 (25.1)	128 (25.0)	1,336 (25.2)
58	111 (25.2)	102 (25.5)	131 (28.9)	110 (22.9)	116 (21.4)	127 (31.8)	98 (27.5)	130 (32.9)	108 (37.6)	86 (24.4)	106 (29.1)	146 (30.6)	1,371 (27.7)
59	122 (29.0)	123 (28.3)	121 (27.8)	142 (30.3)	160 (28.7)	96 (24.4)	125 (32.5)	105 (32.6)	100 (34.8)	98 (29.5)	102 (30.5)	121 (26.6)	1,415 (29.3)

() = %, 初診患者数に対する比率

表 6 居住地別初診患者数

	55年度	56年度	57年度	58年度	59年度	合 計
福岡県内 24,092 (92.6)	小倉北区 1,334 (24.0)	1,298 (24.1)	1,250 (23.6)	1,181 (23.9)	1,121 (23.2)	6,184 (23.8)
	小倉南区 807 (14.5)	797 (14.8)	790 (14.9)	787 (15.9)	779 (16.1)	3,961 (15.2)
	北九州市内 八幡東区 458 (8.2)	446 (8.3)	392 (7.4)	343 (6.9)	333 (6.9)	1,972 (7.6)
	18,573 八幡西区 436 (7.8)	461 (8.6)	408 (7.7)	377 (7.6)	376 (7.8)	2,058 (7.9)
	(71.4) 若 松 区 246 (4.4)	247 (4.6)	305 (5.8)	229 (4.6)	251 (5.2)	1,278 (4.9)
	門 司 区 311 (5.6)	277 (5.1)	267 (5.0)	304 (6.1)	284 (5.9)	1,443 (5.5)
	戸 畑 区 349 (6.3)	345 (6.4)	371 (7.0)	303 (6.1)	309 (6.4)	1,677 (6.4)
	遠 賀 郡 158 (2.8)	141 (2.6)	156 (2.9)	103 (2.1)	99 (2.1)	657 (2.5)
	中 間 市 119 (2.1)	84 (1.6)	73 (1.4)	75 (1.5)	72 (1.5)	423 (1.6)
	鞍 手 郡 65 (1.2)	77 (1.4)	69 (1.3)	68 (1.4)	57 (1.2)	336 (1.3)
	北九州市外 直 方 市 69 (1.2)	91 (1.7)	89 (1.7)	95 (1.9)	113 (2.3)	457 (1.8)
	5,519 田 川 郡 91 (1.6)	81 (1.5)	83 (1.6)	83 (1.7)	89 (1.8)	427 (1.6)
	(21.2) 京 都 郡 145 (2.6)	161 (3.0)	178 (3.4)	148 (3.0)	147 (3.0)	779 (3.0)
	行 橋 市 204 (3.7)	191 (3.5)	180 (3.4)	143 (2.9)	159 (3.3)	877 (3.4)
	そ の 他 331 (6.0)	303 (5.6)	324 (6.1)	308 (6.2)	297 (6.2)	1,563 (6.0)
福岡県外 1,831 (7.0)	山 口 県 196 (3.5)	186 (3.5)	186 (3.5)	176 (3.6)	151 (3.1)	895 (3.4)
	大 分 県 156 (2.8)	141 (2.6)	109 (2.1)	106 (2.1)	108 (2.2)	620 (2.4)
	そ の 他 86 (1.5)	58 (1.1)	61 (1.2)	60 (1.2)	51 (1.1)	316 (1.2)
	不 明 0	5 (0.1)	10 (0.2)	58 (1.2)	30 (0.6)	103 (0.4)
合 計	5,561 (100)	5,390 (100)	5,301 (100)	4,949 (100)	4,825 (100)	26,026 (100)

() = %

10. 主訴別初診患者数 (率)

55～59年度5年間の初診患者総数を主訴により分類すると、歯髓または根尖歯周組織の疾患に関するものが、4,429名 (17.1%) と最も多く、次いで、歯牙以外の硬組織疾患に関するもの-4,338名 (16.8%)、歯肉または辺縁歯周組織の疾患に関するもの-3,977名 (15.4%) の順であった。比較的少なかったものは、歯牙の萌出異常 (発育異常) に関するもの-364名 (1.4%)、予防処

置に関するもの-297名 (1.1%)、歯、歯肉、顔面周囲違和感-424名 (1.6%) であった (図4)。

考 察

紹介患者は、紹介状もしくはそれに類するものを持参した患者だけとし、口頭によるものは除外した。統計をとり出した57年度から3年間についてではあるが、各月とも、初診患者の20～35%が紹介患者で、また、その割

- A. 歯牙の萌出異常（発育異常）に関するもの
- B. 歯牙硬組織疾患に関するもの
- C. 歯髄または根尖歯周組織の疾患に関するもの
- D. 歯肉または辺縁歯周組織の疾患に関するもの
- E. 不正咬合を含む歯、顎、顔面異常に関するもの
- F. 歯牙以外の硬組織疾患に関するもの（顎、顔面の慢性腫脹を含む）
- G. 歯肉、辺縁歯周組織を除く軟組織疾患に関するもの
- H. 咀嚼機能の回復に関するもの
- I. 予防処置に関するもの
- J. 歯、歯肉、顔面周囲違和感
- K. 治療依頼、その他

図4 主訴分類による初診患者の比率

合も年々高くなる傾向が見受けられ、当病院が二次歯科医療機関としての役割が大きいことが伺える。紹介患者の多くは、口腔外科的な診断および処置に概当すると思われるので、初診患者の年間推移、月間変動について、口腔外科の安定した患者数を担っているものと思われる。北村ら（1978）²¹ は、昭和47、48年度の2年間の統計をとった結果、鶴見大学附属病院における紹介患者数は1,847名で、総数の26.5%を占め、月別にみると3月が最多で12月が最少であったと報告している。当病院の紹介患者の割合と比較すると、ほぼ同率と思われるが、本病院では口頭による紹介患者を含んでないので、実際にはまだ高い値となるであろう。また、当病院は鶴見大学と異なり、紹介患者の割合が高い月や低い月が一定しておらず、年間を通してコンスタントに見受けられるようである。

初診患者の居住地区をみると、紹介患者や矯正治療を望む患者などの特殊な場合を除くと、初診患者の大多数

は近距離から来院しているようである。榊原ら（1969）^{3,4)} は、愛知学院大学附属病院の初診患者について、自宅から病院までの所要時間が10分以内の者が全体の29%、20分以内を含めると54%、30分以内になると約70%を占めると報告している。鶴見大学の北村ら（1975）⁵⁾ は、神奈川県内が78.5%、横浜市内が県内者の28.2%であり、区別にみると、病院が所在する鶴見区が最多であったと報告している。当病院における初診患者の居住地は、県内が92.6%、市内が県内者の約77%であり、区別にみると、小倉北区が最も多く全体の23.8%と約1/4を占めていた（表6）。ここで、小倉北区に隣接する八幡東区と遠距離の八幡西区がほぼ同数であるが、八幡東区に対する八幡西区の人口比（約2.5）を考えると、患者数は遠距離になるほど減少しているのが判る。榊原ら（1969）^{3,4)} は所要時間で、北村ら（1975）⁵⁾ や著者らは距離で初診患者の動向をみているが、病院の所在する地域の交通機関の整備状態、地域住民の距離や時間に対する意識の差、歯科総合病院や個人病院の分布状態などにより、若干の地域差は当然認められるものであろう。当病院において、過去に藤田ら（1977）⁶⁾ や大木ら（1983）⁷⁾ が矯正科来院の初診患者の居住地を報告している。それによると、昭和32～51年度では、県内居住者は全体の84.4%、市内—63.4%、昭和52～56年度では、県内—88.4%、市内—65.5%で、矯正治療を行なう個人診療所が各地に増加しているためか、遠方からの来院者の比率が近年減少していることが伺える。しかしながら、著者らが集計した初診患者全体からみると、矯正患者の北九州市外、福岡県外からの比率は、まだ高いように思われる。

増田ら（1977）⁸⁾ や田中ら（1982）⁹⁾ は、城西歯科大学附属病院の初診患者について、来院の動機として、歯に関する主訴、歯と無関係の主訴、主訴の無いものの3項目に分け、北村ら（1978）²¹⁾ は、主訴分類を12項目に分け検討している。著者らは、北村ら（1978）²¹⁾ の12項目の主訴分類を、当科の予診表に記載されている主訴に応じ、表1の様に、11項目に分類した。元来、患者は治療もしくは正確な診断を求めて来院するのであるから、何らかの主訴が存在するはずである。しかしながら、予診をとってみると、予防処置あるいは初期齲蝕（C₁程度）の早期治療を希望する患者、智歯の予防的抜去依頼、近隣の歯科医院で応急処置を受け、紹介されて来院してきたが症状が消退している患者など、主訴無しとするケースが多く見受けられる。また、慢性の炎症で主訴の部位が明確でないケースも多く、主訴の分類を行なうこ

と自体問題なのかもしれないが、総合予診のとり方をもう一度考えてみる一助になればと思い行なってみた。結果は図4の通りであったが、歯髓または根尖歯周組織の疾患に関するもの、歯肉または辺縁歯周組織の疾患に関するものといった保存的な主訴、および、歯牙を除く硬組織疾患に関するものといった口腔外科的な主訴が高率を占めていた。これらの主訴はいずれも、多くが痛みを訴えている患者と思われるのに対し、機能回復を主訴とする歯牙硬組織の疾患に関するもの、歯列不正を含む歯、顎、顔面の異常に関するもの、咀嚼機能の回復に関するものなどは、7.0～9.5%と比較的低い傾向にある。疼痛を主訴とする患者の緊急性からすると当然のようにも思えるし、口腔外科的な主訴が高率を占めるのも大学病院の特徴であろう。北村ら(1978)²⁾の鶴見大学附属病院では、歯の硬組織疾患に関するもの、歯髓および根尖歯周組織の疾患に関するもの、治療依頼がそれぞれ16.8～18.0%と高率を占めている。北村ら(1978)²⁾の報告では、小児歯科に来院した患者は含まれておらず、分類基準も多少差異があるものと思われるので、当病院とは一概に比較できない。しかしながら、歯牙の疼痛を訴える患者と同程度の割合で齲蝕の治療を希求する患者が来院しているのは地域的な差であろうか。特に、歯科の2大疾患である、齲蝕や歯周疾患の予防や早期治療が叫ばれて久しいが、齲蝕に関して言うならば、当病院では疼痛が生じて来院する患者に対し、早期治療を受けに来院する患者が約半数と少なく、まして、予防処置を望む患者は極めて少ないのが現状のようである。

結 論

昭和55年4月から昭和60年3月に至る5年間に、九州歯科大学附属病院を受診した初診患者26,026名を対象と

して、月別、性別年齢別、保険別、診療科別、紹介患者の割合、居住地区別、主訴分類について検討を行ない、次のような結果を得た。

1. 初診患者数を月別にみると、7、8月、3月に多く、冬期に少ない傾向であった。性別年齢別にみると、男女とも0～9歳が最も多く、次いで30～39歳もしくは20～29歳の順であった。
2. 初診患者数を月別保険別にみると、保険本人は12月を除きほぼ一定であったが、保険家族と一般患者は7、8月、3、4月に多い傾向であった。
3. 初診患者数を月別診療科別にみると、口腔外科は春から夏にかけて多く、保存、補綴、予防歯科は12月を除きほぼ一定であった。小児歯科、矯正は他科に比して月間変動が著しく、3、7、8月に急増する傾向であった。
4. 紹介患者数は経年的に増加傾向にあり、初診患者全体からの比率でみると、年間を通しコンスタントに20～40%認められた。
5. 初診患者を居住地別にみると、福岡県内が92.6%、北九州市内が71.4%であった。病院が位置する小倉北区が北九州市内で最も多く、総数の約1/4(23.8%)を占めていた。
6. 初診患者を主訴により分類すると、歯髓または根尖歯周組織の疾患に関するもの、歯牙以外の硬組織疾患に関するもの、歯肉または辺縁歯周組織の疾患に関するものといった疼痛性の主訴がそれぞれ15.4～17.1%と高率であった。

本論文の要旨の一部は、昭和60年5月第45回九州歯科学会総会、および昭和60年9月第7回日本口腔衛生学会九州地方会総会において発表した。

引 用 文 献

- 1) 宮崎秀夫・中山浩太郎・十亀 輝・斎藤敏昭・佐伯榮一：九州歯科大学附属病院における初診患者の統計的観察(その1)。九州歯会誌 39:622—629, 1985.
- 2) 北村中也・角田治美・高梨英樹・信楽みどり・寺田恵美子：本学歯学部附属病院における初診患者の主訴および疼痛について。鶴見歯学 4:7—11, 1978.
- 3) 榊原悠紀太郎：愛知学院大学歯学部附属病院新来患者の動向について〔会〕。口腔衛生会誌 19:62, 1969.
- 4) 榊原悠紀太郎・平野富子・森やす子・高山陽子：本学附属病院における新来患者の動態について〔会〕。愛院大歯誌 7:194, 1969.
- 5) 北村中也・連 政男・高梨英樹・河井節夫・寺田恵美子：予防歯科で扱った2年間ににおける初診患者の動態について。鶴見歯学 1:37—43, 1975.
- 6) 藤田邦彦・大内英明・永松ふみ子：九州歯科大学附属病院矯正科を訪れた患者の過去20年間の統計的観察。

九州歯会誌 31:347—377, 1977.

- 7) 大木 淳・上山 宏・児玉紳介・瀧口玲子・野代悦生・藤田邦彦：過去5年間に矯正治療相談で来院した新患の調査．九州歯会誌 37:401—410, 1983.
- 8) 増田 屯・岩野 孝・景山健介・町野 守・林 守本・黄 安石・佐藤正文：城西歯科大学予診科における新患の臨床統計的観察．城歯大紀要 6:269—278, 1977.
- 9) 田中庄二・福田睦子・岡田典久・加藤栄夫・中野憲一・中里義博・後藤俊介・邱 栄徳・町野 守・増田 屯：城西歯科大学予診科における新患の臨床統計的観察—第2報—．城歯大紀要 11:244—251, 1982.